月 報　第464号　東京バッハ合唱団　2001年3月
〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-17-21-101　Tel:03-3290-5731　Fax:03-3290-5732
E-mail:bachchortokyo@aol.com　http://www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/

東京バッハ合唱団 2001年計画

◇第89回定期演奏会―祝典のバッハ―
5月12日（土）18:00、石橋メモリアルホール

◇新日フィル･ヴィオラの仲間による特別演奏会
＜G.ワルブレヒト氏の定年退職を記念して＞
6月4日（月）19:00、品川教会
団員有志がカンタータ第106番に友情出演

◇東京バッハ合唱団創立39周年記念懇親会
7月2日（月）18:30、目白聖公会
◎シンポジウム＜心・くらし・歌＞
発題者 務台孝尚（後援会員、曹洞宗住職）
丸山真人（後援会員、社会経済学者）
司会 大村恵美子
◎夕食会 20:40、目白「揚子江」

◇＜ばっはめいと＞第18回演奏会
7月22日（日）14:00、経堂・ヤマハホール

◇野尻湖合宿　8月2日（木）－5日（日）

◇野尻湖特別演奏会
8月4日（土）19:00、長野県野尻湖畔神山教会
カンタータ第9番、第29番、第140番
無伴奏パルティータ第2番 より
Vn小田幸子、Pf内山亜希、東京バッハ合唱団

◇第90回定期演奏会
12月16日（日）16:00、石橋メモリアルホール
カンタータ第36番“喜び昇れ いと高き星に”
クリスマスオラトリオ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

大村恵美子先生のお誕生日（70歳）を祝う会に出席して

［Ⅰ］

菅原 文子（団員）

2001年3月3日（土）お雛さまの日に、大村恵美子先生の古希を迎えるお誕生日(3月9日)をお祝いする会が、練習後、桜新町の和食レストラン＜胡麻屋＞で開催されました。参加者は、大村先生、伴奏者の大橋さん、団員22名、計24名でした。

加藤さんの司会、川戸さんの乾杯で会が始まりました。この日のお世話役は、合唱団創立時からの方々で、その中西さん、高野さん、加藤さんからそれぞれご挨拶がありました。ひきつづきお食事をいただきながら、出席者全員の貴重なお話を聞きました。それらの中から思いつくままに、ご紹介いたします。

S中西さん　今年お仕事の定年を迎えて、この4月からは夜間の神学校で学びます。先生と最後まで合唱団の活動を共にしますと意志表明をされました。

A高野さん　先生とは都立三鷹高校生時代に音楽の指導を受けて以来とのこと。

B加藤さん　先生が、バッハの音楽を生活の中に根ざしたものとしてゆく考えで合唱団を始められ、そを音楽生活の第一に据えてこられました。

S吉崎さん　国立小児病院の若きナースですが、昨年入団以来のめり込み、自室で練習を始めると隣から雨戸の閉まる音がするので困っています。光野孝子先生のご指導(個人レッスン)の効果ありですね。

T高田さん　小児科の医師。テノール歌手として活躍されたお父様が亡くなられたあと、昨年演奏会を聴かれたのをご縁に入団、ご自分が同じテノールとして合唱団にあることの不思議を語られ、右脳を使うことがボケ予防に効果ありというお話でした。

A田中さん　B山口さんと同期（1982年）の入団。創立40周年にあたる来年のロ短調ミサ曲にとりくむためには、各自が先生からいただく資料を注意深く読みこみ、音楽性の高いものにしてゆくことが必要と、先生になり代わって力説されました。

T川戸さん　古希の意味を、聖書の引用をもとに話され、健康が第一と、ご自分はバッハとヨガで若若しい高年期を過ごされ、すばらしいと思いました。

T大村さん　質問に答えられるかたちで、先生が演奏会にどのように臨んでおられるか、いちばん身近な立場で言われたことは、含蓄のある次のようなことでした。「入念な計画と実行の積み重ねにより、演奏会の前にはよく風邪で休む（２日ほど）ことも含めて長いスパンで準備をし、当日は不安よりも満

ち足りた態勢で臨んでいる。」

先生のお話では、学生時代に病気の一時期があり、無理はもうききませんよと言われて以来、何となく30歳までという気でいたので、それ以降はいくら長くてもみんな余生と感じていること、年数回の演奏会が待ち遠しいくらい楽しみで、もっと毎月あってもよいくらいに思っているとのこと。

そして現在、周囲の方々の介護とか、病気療養中、また身内のご不幸にあわれた団員の方々に、深く心をとめていらっしゃいました。

Ａ山崎さん　先生にお元気で長く続けていただくために、練習の往復のタクシー代を考える必要があると提言されました。たしかにそうですね。最近よく躓くことのあるわが身がうなずいていました。

最後に全団員から、先生にプレゼント（春らしい軽快なグレイのバッグ）と花束の贈呈。Ｓ荒井さんたちが、楽譜、資料その他じゅうぶんに入る広口のバッグを選んでくれました。全員で記念撮影後、予定の時間をいっぱい超えて散会しました。

先生、お誕生日おめでとうございます。今さらながらすごい合唱団なのだ、そこに連らなれていてよかった、という思いです。そして先生の築かれた計画に向けて、確実にしっかりと揺るぎなく動いていると感じました。人生を重ねることのゆたかさと重みを味わい、心満たされて帰路につきました。

◇菅原さんご自身は、入団30年の熱心なソプラノの一員で、聖ルカ病院等を経て現在は甲府にある山梨県立看護大学教授。単身赴任の忙しさにもかかわらず、土曜日ごとに練習に出席しておられます。（編集部）

［Ⅱ］

三上 裕子（団員）

何があっても前向きに歩まれる大村先生の、古希のお祝いに出席できまして、嬉しうございました。先生から団員全員にと記念品（デスクトレイ）をいただき、毎日重宝しております。

この数年、ことに、皆様と声を合わせるしあわせをつくづく覚えます。ひとときまったく落ち込みそうになりながらも、先生の訳詞と、バッハの音楽のもつエネルギーというか、明るさ・軽快さに魅せられ、慰めを得て、今日まで続けてこられたことを感謝しております。これからもどうぞお元気で、お導きくださいますように。

昨年12月の第88回定期演奏会のことになりますが、先生が、団員のどなたでも感想を書いてくださいと呼びかけらめての方々です。

れましたが、私自身ではな
から、すばらしかったと
いただき、その中に心に
ので、お目にかけたいと
リハビリテーション（交
形外科の若い3人の友人
と通院の方)。皆さん東京

坂本かおりさんより　日本語訳詞のバッハを聴いたのは初めてで、とても新鮮な感じと、母国語のすんなりと受け入れられる感覚で、わかりやすく、またハーモニーもとても良かったです。皆さんアマチュアなのでしょうか？ バッハ合唱団というだけあって、パンフレットなど拝見していても、深く勉強していらっしゃるのがうかがえます。大村先生という良き指導者に導かれ、ますます良くなっていかれることと思います。三上さんがいちばんしあわせそうな笑顔で歌っていらっしゃったのが印象的でした。

佐々木正子さんより　すてきな演奏会でした。三上さんのほほ笑みをさそうような笑顔でお歌いになる姿、とても印象的でした。ありがとうございました。

中西 育子さんより

清けき光 地にこぼれ落つ 小望月の夜
いと妙なる 外(と)つ国が調べ 聞き愛でり
目蓋を閉づれば
中空に 数多の天の御使い 在ると覚えり
言霊の幸ふ国と 言はれし 大和なれど
かの 雅びなる歌声 そがたとひ 外つ国の
言の葉にて 歌はれど
などか等しく 言霊の宿らざらん
われ 菲才にて 真に楽を解する者にあらねど
中国の古への書に
「楽(がく)は楽(らく)なり」(『礼記』)
とあるが如く

楽を聞きて楽しむこと叶ひて 本望なりと覚ゆ
―いと甘美なる楽の波に溺るる良き機会をお与えくださって、深く感謝申しあげます。

ユートピアの書
―Ｅ.ルナン『イエスの生涯』
（忽那錦吾・上村くにこ訳、人文書院）

大村 恵美子

岩波文庫のリストにあげられているこの書を、私はずいぶん昔から読みたく思っていました。けれども絶版で、手にすることができなかったのでした。1863年に、フランスのＥ．ルナンによって書かれ、当時から賛否両論はげしく、また日本で読むことのできる宗教書でもたまに、すばらしいと激賞する人はあったものの、たいていは、19世紀、まだ死海文書の発見（1947年）の前に、文学者によって学的裏づけもなしに描かれたユートピア的物語で、大した評価を与えるに足らないもの、という紹介が多かったように思います。それでも激賞する人たちが少数ながらいるということは、何かがあるのにちがいないから読んでみたい、と思いつづけていました。

1996年5月『創造の世界』（No.98、小学館）中の「イエスとはだれか」という文章のコピーを、著者の笠原芳光氏が送ってくださり、そこで笠原氏が次のように書いておられるのを読んで、私はどうしてもルナンを読みたいという気になりました。

> キリスト教に関する本、イエスの生涯に関する本はあまたありますが、そのなかで私がいちばんいいと思うのは、フランスのルナン（1823－92）が1863年に書いた『イエス伝』です。この本は文学的にすぐれているのですが、正統主義のキリスト教からみると自由主義的で、異端の書として教会では読まれない。『イエス伝』は明治41年に綱島梁川によって訳され……その後、津田穣が訳したものが岩波文庫の『イエス伝』ですが、これも絶版になっていて、復刻されることを願っています。

ところが最近、新聞紙上で新訳が出たことを知り、最初の広告の切りぬきをなくし、今年になってやっと手に入れることができました。きっとどこかで、しかるべき識者が、適切な評と紹介をしていることでしょう。できれば私は、それらをひとつ残らず読んでみたいと思いますので、見かけた方は教えていただければさいわいです。

いまはここで、そういう客観的なインフォメーションひとつ持たない、私個人の感想として、なるべく多くの方々に、ご自分で読んでいただきたいという一心で、ご紹介するわけです。――

初めて新約聖書そのものに接したとき、私は、この内容がもし全部架空の物語だったとしても、それはそれで、そんなものが人間のあいだに残ったということは、壮大な奇蹟だ、というふうに感じました。そして、イエスの実在性を疑ったり信じたりする前に、たとえ文学的感銘とけなされようと、神の愛の真実であることにはちがいないと、確信しました。

いま、ルナンのこの本を読んだ気持は、それに似ているもののように思えます。伝統的なキリスト教の解釈からすれば、とんでもないことが多々述べられていることでしょう。しかし、それらの多くは、現在の私にとって、むしろ新鮮であり、戦後の飛躍的な聖書学の成果の恩恵に浴した立場からしても、新しい妥当性をもった解釈のほうが、ルナンには圧倒的に多いのではないでしょうか。これからも、もしこの書がまともに一般にとりあげられるなら、どの点が、学問的におかしいとされるのか、ひとつひとつ指摘されるのを見てみたいものです。「あんなものは、まともに扱うに価しない」という印象批評ならば、おそらく自己の従来の見解の上に立った、主観的な好き嫌いの発言となるおそれがあります。

肯定的に、ルナンを受け入れたい気でいっぱいの私にとっても、はてな、ほんとうにそうだったのだろうか、というようなところも、もちろんあります。たとえば、イェルサレムをとりまくユダヤに対比させて、イェスの生まれ育ったガリラヤを、美しいおだやかな自然にかこまれた、穏和でたがいに信じあう単純明快な庶民たちの故郷、というように、あまりにユートピア化してしまっているのではないか。そんな柔軟で、偏狭でなく国際的にも寛容にひらかれた地盤から、イェスはあらわれた、彼の説きあかす神の国の原型が、そこにあったのだ、というわけですが、ほんとうに当時のガリラヤは、そんなによいことずくめの所だったのだろうか―、もし反対に、そうでなかったとすれば、イェス個人の独自性がかえって、それだけ突出したものだった、ということにもなるでしょう。ここはルナンとともに、ガリラヤを美しい桃源郷とみたてたとしても、それはそれで、人類の見果てぬ夢ではありましょう。

イェスの人となりの描写や解釈を、ルナンの独断偏見とするかどうかは、どんなに考証のすぐれた学者の場合であっても、まったく問題は同じで、数年前に「死海文書」のことがジャーナリズムの間でクローズアップされて、世界中の研究所の、真実を認定する学者たちの作業の様子を、私たちも垣間見ることがありましたが、その時にも、人間の判断とは、どんなに先端的に進化しても、ギリギリのところでは、やはり有限ということなのだな、と、痛感させ

られました。

ひとを生かす力が善であり、ひとを死に向かわせる力が悪である、ということを真理と認めるのだったら、このルナンの書は、善の側に立つものであり、多少（あるいは大いに？）おめでたいと思われようと、イエスの福音自体が大いにおめでたくて、人間にはまともに受け入れがたいほどのものである以上、なんの非難にもあたらないのではないでしょうか。イエスの時代から、しきりと大問題視された、イエスは、あるいは人間は、神の子であるのか、神の子とされるのか、神の子となるのか、または神そのものであるのか、という問いは、その後もおそろしい判定のやいばとなって、数えきれぬ人間たちを争わせ、殺し合いをさせてきたのですが、そんな人間の大騒ぎに肩すかしして生きるイエスを、見てごらん、とルナンは言っているのだと思います。そして、長い長い間、イエス抜きの大騒ぎをくりかえしてきた伝統的キリスト教に、私自身もいよいよ愛想づかしを深めているこの頃、この書はクリーンヒットの快感を味わわせてくれました。また訳が現代的にこなれていて、まことに明快で気分よいものでした。

× × ×

ここまで書いたものを、笠原芳光氏にお送りして何か一言でもお言葉をいただけないものかとお問合せしたところ、さっそくにお電話があり、＜月報＞には何か書かねば、とかねがね思っていたので、3月号を拝見の上お送りします、とのことでした。そしてひきつづきたくさんの資料を送ってくださいました。今回はそのうちから、笠原様のルナンの書評を、そのままコピーして皆様にもお目にかけることにし、次なる御寄稿をお待ちしたいと思います。

図書新聞 2000年10月28日 第2507号

斬新なイエス像

十九世紀フランス最大の文人 ルナンのイエス伝

笠原芳光

エルネスト・ルナン 著
忽那錦吾・上村くにこ 訳
▶イエスの生涯
8・20刊 四六判318頁 本体2000円
人文書院

およそ今までに書かれた伝記のなかで最も多いものはイエス伝だろう。

イエスはのちにキリストとされて、その名は世界中に広まった。だがイエスの真の姿はいまも知られていない。とくに幼・少・青年前期の人生は謎である。

これまでのイエス伝はイエスをキリストとする信仰、いわば神学の立場で書かれたものが多かった。近年、聖書を歴史的、批判的に研究する聖書学によって論じたものが、かなり出版されている。さらに文学的なフィクションも多く、このような現象を欧米では「イエス・ルネサンス」と呼んでいる。

そして神、キリストとしてのイエスよりも、人間としてのイエスに関心が高まってきた。人間といっても神と隔絶された存在ではなく、神の問題を内包する人間である。

そんな人間としてのイエスを極力、実証的に、かつ美しい文体で描いたものが、この本である。エルネスト・ルナンは十九世紀フランス最大の文人であり、すぐれた宗教史家として、本書を第一巻とする七冊の『キリスト教起源史』を著した。あまたのイエス伝中、最もすぐれたものが、すでに一八六三年に上梓されたのである。

そこには「イエスは紀元数年前、ガリラヤのナザレの、裕福でも貧困でもない職人の家に生まれた」などと明記されている。これは福音書の神話的なイエス像とはまったく異っている。

この本は発表された当時、ひじょうな反響、とくに批判を呼んだ。ルナンはのちコレージュ・ド・フランスの教授に就任するが、最初の講義でイエスを「比類なき人間」とのべたため、罷免されたという。

また晩年の著『少年時代の思い出』にも、「教会を棄ててもイエスに対する信仰は変らない。イエスは、私の弟子となるために私を棄てよ、と言うだろう」などと記している。

それでも百数十年前、日本でいえば幕末の書であるから、今日の歴史的研究の成果から見れば誤謬といってよい箇所もいくつかある。たとえばイエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けたのは事実だが、イエスも人々に洗礼を授けたとあるのは承認されがたい。

あるいはイエスは最期に十字架の上で「わが神、わが神、なぜ私を棄てたのですか」と言ったと福音書は記しており、本書もそう書いている。だが最近の研究では、ただ一言高く叫んだだけだという。もっともルカ福音書が「父よ、わたしの霊を御手に委ねます」、ヨハネ福音書が「成しとげられた」と言ったとしているのを、ここでは「ある者にはそう聞こえた」としている。これはおもしろい解釈である。

この本は随所に、それまでのイエス観とは異る見解をのべている。たとえば「イエスが勧めた宗教儀式があるかどうか福音書をいくら探してみても無駄だろう。洗礼はたいした意味がないし、祈りも心から祈りなさいというだけで、規則らしい規則はない」とか、「彼の教えは一定の教理ではない。それはどのようにでも解釈できるイメージである。福音のなかに神学的命題を見つけようとするのは間違っている。すべての信仰告白はイエスの思想を歪めるものだ」など、当時としては画期的な見解である。

なかでも本書の最大の特色と思われるのは、イエスをアナキストとみなしたところである。「イエスを当時の煽動者やあらゆる時代の煽動者たちと区別するもの、それはイエスの完全な理想主義である。ある意味でイエスはアナーキストである」「権力を握っている者や金持ちに取って代わろうとする企ては、けっして彼にはない。富者や権力者をこばそうとするが、そうなりたいとは思わない」

イエスをこれほど明確に権力否定の思想者とした説は他にない。これは今日でもおどろくべき発言であり、この書のハイライトといってよい。

ところでルナンのイエス伝は、すでに明治四十一年に綱島梁川・安倍能成共訳『ルナン氏耶蘇伝』として三星社から上梓された。そして昭和十六年には津田穣訳の『イエス伝』が岩波文庫として刊行されている。

こんどの『イエスの生涯』はルナン自身が一八七〇年に普及版として作成したもので、原書より幾分、簡潔である。たとえば原書ではイエスの復活を「マグダラのマリヤの強い想像力」によるとしている部分が、この普及版では省かれている。

訳文はこなれた現代語訳であり、きわめて読みやすい。それに多くの挿絵も入っており、イエスの頭に円光がついていないところがよい。二人の訳者はともに、いわゆるキリスト者ではないという。そのほうがこのような本、そしてなによりもイエスにふさわしいというべきだろう。

（京都精華大学名誉教授・宗教思想史）